



子ども食堂を つくろう

社会福祉法人
新潟市社会福祉協議会

はじめに

各地で「子ども食堂」が新設され、その運営にボランティアだけでなく地域の様々な立場の大人たちが参加する等「子ども食堂」は社会的な広がりを見せています。

しかし、一方で「子ども食堂とは何なのか?」「子どもの貧困対策なのか?」「誰のため、何のためにやるものなのか?」といったような疑問や戸惑いも耳にするようになってきています。

一般的に、親子または子どもが1人でも安心して訪れることができ、無料あるいは安価な参加費で食事が提供される居場所を「子ども食堂」と呼びます。

温かいご飯を介して集う交流拠点のなかで、人とのつながりが生まれ、自然な形で子どもたちと学習や進学、就労、家庭環境といった会話をすることで、諸問題に気づき情報提供や必要な関係機関につなぐ等、家庭だけで抱え込むことのないよう配慮できるのも子ども食堂の役割として期待されているところです。

そして、「強い関心のある人たちの取組」から「普通のおじさん、おばさんたちがあたりまえに気にしてくれる取組」へとさらに広がっていくことが望ましいと思います。

また、「子ども食堂」が広がっていることは喜ばしいですが、他方で「質」の問題が指摘されるようになってきています。そのために、運営するスタッフらがネットワークをつくり、情報交換の機会を設け、互いに連携し、子どもたちを支える地域の機能が整備されることを願います。

この活動は息の長い活動です。

いま、「地域の子どもたちに必要とされている場とは何か」「子どもたちが必要としているものは何か」を一緒に考えながら、地域の子どもたちや家族に寄り添い、支える地域社会をみなさんと一緒に作っていきたいと思っています。

新潟市社会福祉協議会 常務理事
高橋 勝太郎

もくじ

はじめに	1
子ども食堂ってなあに?	3
なぜいま、子ども食堂なのか ~食の視点~ 子どもと親を支える支援の場	
子ども食堂のつくり方 ~子ども食堂が立ち上がるまで~	5
相談窓口紹介/相談事例	
1. まずは、仲間あつめ!!	6
①運営スタッフを集めよう! ●「気持ちは共有すると形になる」 ②ボランティアを集めよう! ③地域の“得意”を集めよう!	
2. 見学に行ってみよう!	7
①視察依頼の手順 ●新潟市の子ども食堂 MAP ②視察のメリット	
3. 子ども食堂の場所を決めよう!	8
①開催の時間帯と頻度に合う場所を探してみましょう ②徒歩圏内か駐車場はあるか ③場所の候補を決めたら・・・ ④全国の開設場所	
<具体的に決めること>	
4. 運営団体について	8-9
①団体の名前 ④活動費の管理 ②目的 ⑤役割分担 ③開催日のスケジュール ⑥団体の会則又は規約	
5. 子ども食堂について	9
①参加対象者 ④備品、食材 ②参加費 ⑤事前登録用紙(参加者用・ボランティア用) ③開催日(回数・日時) ⑥受付簿(参加者用・ボランティア用)	
参考資料	10
6. 運営で注意すること	11
①アレルギー対応 ②保険加入について ③衛生管理	
7. 地域への周知方法	12
①地域への挨拶、説明会を開く ②フェイスブック・ブログの開設 ③TV・新聞社への取材依頼 ④チラシ・パンフレット	
8. プレオープン&オープン	12
<プレオープン> <オープン> ①プレオープンの目的 ①オープン時のメニュー ②プレオープンの効果 ②オープン当日必要なもの	
「子ども」と「地域」の未来へ	13
どうして地域に子ども食堂が必要なの? 地域交流の居場所と子ども食堂は違うの? 子ども食堂が地域をつなげる	
新潟市に子ども食堂がやってきた! <座談会>	15
役立つ助成制度	17

子ども食堂ってなあに？

親子や、または子ども1人でも安心して訪れることが出来る無料、あるいは安い参加費で食事が提供される居場所を「子ども食堂」と呼びます。

なぜいま、子ども食堂なのか ～食の視点～

現代の日本は、一見食物が豊富にあるように見えます。しかし、家族が夜遅くまで働かなくてはならない、経済状況が厳しいなどにより、これまで日本人が、家族で食卓を囲み、楽しく、ご飯と魚や肉、野菜等の多様な食物を組み合わせて食べる食事（「きちんとした食事」）をできない家庭も出てきています。「きちんとした食事」を保障することは、成長期にある子どもの心身の発育にとって重要なだけでなく、大人になってからの健康的な食習慣につながるという意味でも重要です。すべての子どもに「きちんとした食事」の機会を保障することは、すべての大人の責任でもあります。

「子ども食堂」は、「きちんとした食事」を食べたり、作ったりする体験を子どもに提供します。また、子どもにとっては居場所であり、保護者にとっては地域の人とつながる場でもあります。食を通して、社会全体で子どもを健全に育てることを「見える化」した市民の挑戦といえます。

新潟県立大学 人間生活学部長
村山 伸子

子どもと親を支える支援の場

子どもが保育所時代、降園から就寝までの間、子どもへの私の口癖は「早くしなさい」でした（小学生になった今も同じですが）。迎えに行く時間が遅い、車のため駐車時間の短縮、帰ってから食事の準備、その後の寝るまでの時間を考えて「早く帰ろう！」とせかしてばかり。帰宅後も「早く、早く！」。寝付いてから「ゆっくり向き合ってやればよかった」と思うこともしばしばです。

新潟市では7割近い家庭が共働きであること、ひとり親家庭が1割弱あること、父母とも帰宅時間のピークが18～19時であること（2013年）を考えると、同じような思いの保護者が多いのではないのでしょうか。

毎日でなくてもいい。「早くしなさい」を（何度も）言わなくていい日があるだけで、親はホッとします。子どもへの関わりのゆとりを生みだし、子どもの福祉や子育て中の親を支える営みになる。子ども食堂はこういった親を支える「子育て支援」の場にもなっています。

新潟県立大学 人間生活学部 子ども学科准教授
小池 由佳



寄付でいただいた旬の野菜



寄付でいただいた食材を使った料理



地域の3世代が集まる場所

